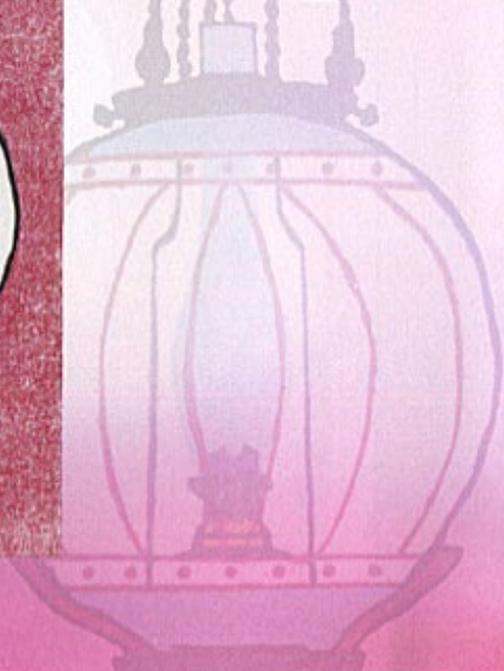




春燈

2016
June

6月号



主宰の句

安立公彦



愛新覚羅溥傑仮寓の落花かな

(千葉市ゆかりの家いなげ三句)

杜甫の詩に託す望郷春はゆく (溥傑真筆)

縁に座す皇弟夫妻 凶うららけし

佳き昭和なるや暮春の吊ランプ (神谷伝兵衛稲毛別荘)

爛漫の花に手かざす巫女ふたり



寝ても覚めても牡丹の芽思ふ

『午前午後』昭和四十七年

牡丹の句は、昭和四十四・五年に急に増えた。新興俳句時代の連作の名残とする人も居る。『午前午後』の後記に、「集中、身辺日常の句を繰り返していることはいつもと同じである」と記している。「花鳥とともに人間が居、風景のうしろに人間がいなければつまらない」と常々語っている。牡丹の句も、牡丹そのものではなく、牡丹を愛する心の投影（抒情）ではなからうか。

林 紀 夫



安住敦の句

母が泊りに来る夏布団つくろひし

『古暦』昭和二十五年

まず、何んの飾る言葉も表現もなくとも、先生のご母堂に対するなみなみならぬ、おやさしいご心懐が窺われます。

時あたかも、戦後間もなくの物資の不足の折柄で、「つくろひし」には、心を打たれます。私も、七年程前に母を亡くし、母との至福の時間が思い出されました。

府川 昭子

燈下集



○ 小林のり人

信濃川春の出水となりにけり
あるだけの椅子満席や涅槃寺
春耕や棚田十枚蟹部落
百円の望遠鏡や山笑ふ
妻の留守一膳飯の目刺かな

○ 三上程子

椿餅余談に花を咲かせけり
鯉はぬる音の間合の日永かな
めづらしき人の来りぬ花の雨
厄介な話を残し鳥帰る
朧夜の家のまはりを歩きけり

○ 井上春子

街路樹の辛夷や街を染しくす
蟻穴を出て土砂降りに逢ひにけり
柳の芽吹かるる度に濃くなりぬ
残り鴨背中吹かれてをりにけり
よく動く子犬の尻尾春の昼

○ 橘正義

三月や朝の眩しさまづ賞でて
三月十一日もう五年まだ五年
冴返る車窓一瞬遠筑波
はちきれんばかりの蕾紫木蓮
鮎子に酌む酒「一人娘」かな

○ 中野 あぐり

曾孫の生れて目出たき四月かな

オリブの花やレオナルドの謎解けず

白あぢさゐ白を尽くして潔し

水音の埋めゆく余白花菖蒲

河骨の水の平らな真昼かな

○ 諸戸 せつ子

棕栢の枝かつぐ少年聖枝祭

存へて桜満開ありがたき

朝ざくら亡夫と歩きし日のはるか

飯蛸の甘めのたれも米寿過ぐ

春の夢寝返りうつて壊しけり

○ 大嶋 洋子

ちらほらと桜便りの届きけり

花だより話かけたき人は亡し

花曇面影遠くなりしかな

潮の香の近づく坂や松の花

鳥帰る沖を見つめてさやうなら

○ 綱 徳女

哀惜は胸にたたみて野に遊ぶ

寄せ墓の十基ばかりや花の翳

さくらの夜さりげ無く腕組みにけり

花吹雪舞ひ止まぬなり夢の中

一心のやがて無心やしやぼん玉

○ 中村 嵐楓子

春雷や鏡花いざなふあちら側

ええ一席亀めが鳴いてみせます

三行に一生憑かれ啄木忌

四月馬鹿この指十四か十六か

百選といふ里山や鳥交る

○ 鷹崎 由未子

初花やをんなに生れて気はづかし

花冷や心の隅のシュレツダー

常無しの世とぞ思はば友と花

道ゆづる心も笑顔の桜かな

花の雨ひとりの箸をかへにけり

○ 小張 昭一

海苔浜の間を流し五目釣

忘れねば思ひ出ださず篝火花

春眠の覚めて浦島太郎かな

清明や車窓に過ぐる富士全容

身に合はず杖の長さや春惜しむ

○ 鈴木 鳳来

鶴翼の要を偲ぶ残る鴨（樟・上山永覺様）

立雛を寝かせて箱に納めけり

朝採りの蕨が目玉道の駅

茶畑の畝もりあがる春の月

春愁や水族館の回遊魚

○ 松本 峰春

隠れ切支丹の裔に住む島若布干す

末黒野で隔てて蚕の村を置く

流れへ雛置くとき揺るるイヤリング

夕星を見るに鞆高う漕ぐ

ハイカラな街を一望風光る（神戸ポートタワー）

○ 木村 傘休

この年の花もまだ見ぬ別れとは

明日のこと思はぬでなし浅刺汁

天平の七堂伽藍鳥雲に

春出水出羽の遠嶺は雲とかず

湖にもどる日差や桜東風

○ 加藤 良子

空大き安房の青空あらせいとう

鶴引くや一撃受けし胸の内（樟・上山先生）

鶴帰る祈りの鶴を折りにけり

眼裏に遺るあれこれ春惜しむ

靴の紐締めて句会や老いの春

○ 鈴木 静恵

追分の雲の流離や春寒し

青饅や宿坊に聞く山の音

伊予柑を一会の人と分かちけり

子規堂の机ひとつや春の塵

紙風船病む子の窓に吊しけり

当月集

安立 公彦選



○ 齋藤晴夫

鳥帰る相模大山晴るる日に
鶯の宿とおぼしき藪苳らる
名草の芽立ち一気や嬰兒の育つ
北陰の落花の風趣優りけり
深しんと花の吹雪に佇ちつくす

○ 吉村さよ子

春昼の音する池のにごりかな
マラソン碑に遺る足形山笑ふ
畦堀のいそぎ浚ひや田螺鳴く
書架の狭間に触れ行く背や春愁
青空に古木のかまへ梨の花

○ 石橋邦子

遊子師なき利根の堤のさくらかな
観音堂へ風吹きあぐる花の屋
雲にのる飛天の衣や草おぼろ
遠く啼く雉子のこゑのひびきけり
鳥帰る佃住吉あづま町

○ 鶴岡紀代

春の海鳶の先ゆく一丁櫓
安房天津磯の口開けひじき刈
古民家の提灯箱や燕の巢
大川の春の匂や梅若忌
川風や浅蜷めし屋の紺のれん

○ 伊藤百江

思ひ出に何時も母居る雛まつり
雛あられ卒寿の膝に零れけり
はらからの絶ゆるふるさと桃の花
蛤の殻も玩具に雛まつり
外灯の明かりはらはら春の雪

春燈の句

安立 公彦選

連翹の籬真昼のひかり寄す

東京 那須 禮子

春昼や吹きやがてわらべ唄

花いとしつづくりて吾れ老い来しが
春光やすつくと伸びし孫の四肢

島根 土江 比露

風のごとカフェテラスを飛ぶ燕

時雨忌や淡き灯点る高灯籠(大垣市川邊)

島根 土江 比露

白き蝶りらの花房より生るる

雁去りて浮雲映す水田かな

島根 土江 比露

花の雲十九の兄の墓洗ふ

茨城 山崎 刀水

重石置く生簀の蓋や水温む

島根 土江 比露

草の葉の音なき雨や春闌くる

竹垣の男結びや梅真白

島根 土江 比露

線香に煙れる墓や春の風

盆梅と余生を生きし父なるや

兵庫 向井 芳子

酔へばすぐでてくる軍歌昭和の日

初恋を語る少女やたんぽぽ黄

兵庫 向井 芳子

清明やコロラトウラの円舞曲

東京 中澤 弘

ふらここや夫婦の揺れの行違ふ

兵庫 向井 芳子

ちぎれ舞ふ船出のテープ東風曇

草摘むや妻の時間を飛出して

千葉 廣瀬 克子

行灯の地口愚痴めく花疲

ウィーンより帰り来し子と彼岸寺

千葉 廣瀬 克子

彼岸寺頼る手摺の艶たふと

尾羽根立て水をつかんで鴨帰る

千葉 廣瀬 克子

神に謝す吾が三月の誕生日

東京 吉田とよ子

交番の灯のほのぼのと春の宵

千葉 廣瀬 克子

つつみ打つ母の思ひ出団子花

花どきの靖国神社久しぶり

千葉 廣瀬 克子



余言

安立公彦

鞦韆立漕ぎ少年山の彼方恋ふ

片桐てい女

「鞦韆」については以前にも書いたが、中国唐代以後春の初めの女性の遊びであったという。北宋の詩人蘇軾の余りにも有名な詩「春夜」にも登場する。「春宵一刻值千金（略）鞦韆院落夜沈沈」へ後半は、中庭にさがったふらんこがあり、夜は重たげにふける。小川環樹注。

この句、上五の「鞦韆立漕ぎ」がいい。字余りになっているが、その字余りが、中七下五をみごとにいざなう。この「少年」は小学校高学年か。「山の彼方」は詩の一節ではない。山は少年の生活とともにあり、その生活を縛るものでもある。やがて少年はその山に挑戦する。鞦韆を立漕ぎしながら、視線の先にある「山」のその彼方と思う。その思いはいつか「恋ふ」となるのだ。成長期にある少年の信念を、あたたかく見守り表現した句である。

花の雨ひとりの箸をかへにけり

鷹崎由未子

俳句は表現詩である。それも世上最も短い表現詩である。一句の構成は、幾つかの要素を調べに則り組み立てることになる。久保田万太郎先生はそれを「浮かぶ」と称した。構成という集約は時間を必要とする。浮かぶは瞬時だ。しかし万太郎先生の「瞬時」には、表現に至る言葉の整理がベースとなっているのを忘れてはならない。

この句を見ていて、そういう俳句の基本とも言つべきことなどを思った。「ひとりの箸をかへにけり」は、幾つかの言葉の中から構成という集約を経て選ばれた表現である。言葉の選択が善い。作者の動きや表情が、そこに至る「時間」を背景によく活かされている。「花の雨」も適切だ。調べのうつくしい充実した句である。

この年の花もまだ見ぬ別れとは

木村 傘休

故人を偲ぶ句である。今年は春先から、本多遊子、上山永晃という両先達を失った。「この年の花もまだ見ぬ」は作者にとつても、私たちにとつても、ことに喪失感の深い言葉である。悲痛な哀悼の言葉である。しかし一句はそこでは終わらない。下五の「別れとは」という嘆きの思いが、中七を受けて作者の身内を占める。呟きのような表現が、却つて一句の思いを深めている。

洗濯機みがき上げたる花曇

太田佳代子

戦後の昭和二十五年代、有用な電気製品を、三種の神器と呼んでいた頃があった。テレビ、洗濯機、電気冷蔵庫の三種。中でも洗濯機は主婦の労力を大幅に縮小するものとして好評だった。洗濯板と盥からの解放である。現代ではそういうことは語り種と言うより話題にも上らない。

作者はいま洗濯機を丹念に拭き込んでいる。それは拭くと言うより磨き上げると言うべき丁寧さである。まだ若い主婦には、「三種の神器」の謂れなど生誕はるか昔の出来事。洗濯機という無機物のものを、生命あるかのように、こころを込めて磨き上げるという無私の思いは、句を読むひとの心を打つ。そのことはまた、作者自身の気持をも洗い流しているのかも知れない。「花曇」が適切だ。

少年の古書肆にしやがむ日永かな

荒井 慈

神田神保町のような古書街でなく、中都市の町外れの古本屋。主も客も顔馴染の店である。先ほどから少年が出口近くの通路にしゃがみ込んで無心に本を読んでいる。店主は見て見ぬふりをする。少年の読んでいる本は何だろう。ひと時代むかしだったら、漱石か啄木かと聞きたいところだ。しかしそういうことよりも、この句を見てみると、戦

後の姿が浮かんでくる。焼け残った町にあった一軒の書店と古本屋。俳句というものの呼ぶ連想の世界は広い。

春の川水泡に魚の息づかひ

宮沢 治子

「春の川は詩心をいざなう」と書つたのは飯田龍太だった。この句はその春の川に棲む川魚を詠んで、絶妙の一瞬を写し出している。吹く風はまだ冷たいが、川辺の猫柳はふくよかな絹毛の花穂をつけている。堤に立つて川面を見ていると一瞬ふくと水泡が立つ。続けてまた一つ。水底の魚の立てる水泡である。鮎だろうか。それを作者は、「息づかひ」と表現する。この断定は適確だ。ものみな並べて成育の春。それは川底の小魚にも言えよう。

雁帰る祖国ありやと問うてみる

松山三千江

木々の芽立ちの頃は、また鳥帰る頃でもある。引鶴、引鴨、帰雁。私たちの先人は季節の移り変りに伴う鳥の往き来にも、微妙な句ごころを抱く季語を設けたのだった。中でも「帰雁」はことに別れの哀れを誘う季語である。和歌の例歌も多い。作者はその帰雁に「祖国ありや」と問う。もとより自身の心奥に眩く思いたが、この中七には、帰る雁の無事を祈る気持が言葉を変えて出ている。私たちがその雁に、祖国は彼の地か、はた日本か、と問うてみたい。